㈶米子市教育文化事業団
文化財発掘調査報告書 41

鳥取県米子市

米子城跡

第38次調査

2003

財団法人　米子市教育文化事業団

序

米子市は鳥取県西部の中核都市で、北は日本海に面し、東には大山を控える自然環境に恵まれた地域であります。また、古代からの遺跡の宝庫で、歴史的、文化的遺産にも恵まれています。

当事業団では、この度、マンション建築工事に伴い、米子市加茂町１丁目所在の米子城跡第38次調査の発掘調査を行ってまいりました。

その結果、江戸時代後期以降の建物跡や屋敷の境界を示すと思われる溝を確認しました。これらは当時の城下町の様子を窺ううえで貴重な資料となるものと思われます。

これらの資料が今後の学術研究及び教育のために広く活用され、歴史を解明する契機となるとともに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえでお役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました有限会社益尾地所、並びに地元の皆様をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者、関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成15年（2003年）３月

財団法人　米子市教育文化事業団

理事長　山　岡　　宏

例　　言

1．本書は平成14年度（2002年度）に鳥取県米子市加茂町１丁目において実施したマンション建築工事に伴う米子城跡第38次調査の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は有限会社益尾地所の委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3．本書は高橋が執筆、編集した。
4．出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。

凡　　例

1．本書に用いた方位はすべて座標北を示し、高度はすべて海抜高である。また、座標値は国土座標第Ⅴ系を用いた。なお、掘立柱建物及び溝状遺構の主軸方向は座標北との角度で示した。
2．第１図は１：2,500国土基本図「米子・境港都市計画計画図（米子市）22」と「米子・境港都市計画計画図（米子市）27」を複製、縮小、合成し、加筆したものである。
3．本書に用いた遺構の略号は以下のとおりである。
　ＳＡ：柵列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝状遺構　ＳＥ：井戸　Ｐ：ピット
4．本文中、挿図中、表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
5．遺物観察表中の※は復元値を、△は残存値を示す。
6．米子城跡の遺跡の表記方法については平成７年度（1995年度）までは本調査のみに調査順に番号を付して遺跡名としていた。平成８・９年度（1996・1997年度）は試掘調査を含めて調査順に番号を付し、本調査については平成７年度（1995年度）以前と同様に調査順に番号を付したが、試掘調査については調査順に次数で遺跡名を表した。平成10年度（1998年度）からは本調査、試掘調査とも調査順に次数で遺跡名を表すこととなった。

　平成７年度（1995年度）以前　　米子城跡１～９遺跡
　平成８、９年度（1996・1997年度）　　米子城跡第10～20次調査（試掘調査）
　　米子城跡21・22遺跡（本調査）
　平成10年度（1998年度）以降　　米子城跡第23次調査～

しかし、このように年度によって遺跡の表記方法が異なることは混乱をきたすため、本書では平成７年度（1995年度）以前は本調査のみに、平成８年度（1996年度）以降は試掘調査を含めて調査順に次数で遺跡名を表すこととした。新旧の遺跡名の対照は表１の遺跡名新旧対照表を参照されたい。なお、久米第１遺跡、米子城跡第10～20次調査、米子城跡第23次調査以降は従前どおりである。

新遺跡名	旧遺跡名	新遺跡名	旧遺跡名
米子城跡第１次調査	米子城跡１遺跡	米子城跡第７次調査	米子城跡７遺跡
米子城跡第２次調査	米子城跡２遺跡	米子城跡第８次調査	米子城跡８遺跡
米子城跡第３次調査	米子城跡３遺跡	米子城跡第９次調査	米子城跡９遺跡
米子城跡第４次調査	米子城跡４遺跡	米子城跡第21次調査	米子城跡21遺跡
米子城跡第５次調査	米子城跡５遺跡	米子城跡第22次調査	米子城跡22遺跡
米子城跡第６次調査	米子城跡６遺跡		

表１　遺跡名新旧対照表

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過と方法 …… 1
　第３節　調査体制 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の成果 …… 5
　第１節　調査の概要 …… 5
　第２節　検出した遺構と遺物 …… 5
　第３節　遺構外出土遺物 …… 12
第４章　まとめ …… 14
出土陶磁器、土器観察表
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図 …… 4
第２図　遺構配置図 …… 5
第３図　土層図 …… 6
第４図　ＳＡ－01・02遺構図 …… 7
第５図　ＳＢ－01・02遺構図 …… 8
第６図　ＳＤ－02・04・05・06遺構図 …… 10
第７図　ＳＤ－09・10・11遺構図及びＳＤ－10出土遺物実測図 …… 11
第８図　ＳＥ－01遺構図 …… 12
第９図　遺構外出土遺物実測図 …… 13
第10図　遺構変遷図 …… 15

図　版　目　次

図版１　１区全景（南東から）
　　２区全景（北西から）
　　ＳＢ－01（北西から）
　　ＳＡ－01、ＳＢ－02（南東から）
図版２　ＳＤ－02（南西から）
　　ＳＤ－04（南西から）
　　ＳＤ－05（北東から）
　　ＳＤ－06（西から）
図版３　ＳＤ－09（東から）
　　ＳＤ－10（北東から）
　　ＳＥ－01
　　ＳＥ－01断面
図版４　出土遺物

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

平成13年（2001年）12月、有限会社益尾地所（代表取締役　益尾忠蔵）から、加茂町１丁目におけるマンション建築工事に伴い、埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて米子市教育委員会に協議があった。工事予定地は米子城跡外郭内に位置し、周辺の調査でも近世を中心とする遺構と遺物が確認されているため、米子市教育委員会は平成14年（2002年）２月に工事予定地内の試掘調査（第37次調査）を実施し、近世以降の遺構と遺物を確認した。このため有限会社益尾地所と米子市教育委員会との間で再度、遺跡の取り扱いに関する協議を行い、本調査の実施を決定し、平成14年度（2002年度）に財団法人米子市教育文化事業団が発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過と方法

現地調査は平成14年（2002年）４月に着手した。

調査は排土を場外に搬出せず、場内で処理しなければならないが、排土置場が狭いため、全面調査は不可能であることから、調査区を２つに分けて行った。調査区は北西側を１区、南東側を２区とし、１区→２区の順番で調査を行った。

調査地は宅地として利用されていたところで、現地表面から厚さ約70～80cmにわたって造成がなされていた。そのため調査に先立って重機によりこの造成土を除去し、その後、人力による遺構、遺物の検出を行った。

現地調査は平成14年（2002年）４月末に終了した。現地調査終了後は、出土遺物の整理作業を行い、その後、調査成果をまとめ、発掘調査報告書を刊行した。

第３節　調査体制

発掘調査は下記の体制で行われた。

調査主体　財団法人　米子市教育文化事業団
　理 事 長　森田隆朝（米子市長：平成14年４月１日～平成14年５月27日）
　　山岡　宏（米子市教育委員会教育長：平成14年５月28日～）
　専務理事　山岡　宏（平成14年４月１日～平成14年５月27日）
　　小林道正（財団法人米子市教育文化事業団　事務局長：平成14年５月28日～）
　埋蔵文化財調査室
　室　　長　妹澤佐智夫（米子市教育委員会文化課長）
　次　　長　矢倉紀夫

調査担当　財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室
　調 査 員　高橋浩樹
　臨時職員　福嶋昌子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　米子市教育委員会

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

米子市は鳥取県の西部に位置し、地形的には中国山地から流れる日野川の両岸に広がる沖積平野（米子平野）とこれを取り囲む丘陵からなっている。米子平野は日野川によって形成された日野川扇状地、その北側に低地と発達した砂州からなる日吉津低地、法勝寺川流域に形成された法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなる。

近世の米子は西伯耆の政治、経済の中心であるとともに交通の要衝地でもある。鳥取城下から西へ向かってきた伯耆街道の終点であり、南西から北上してきた出雲街道は当城下東部で伯耆街道と合流する。北部からは北西へ外浜境往来、内浜境往来が走り、東部からは法勝寺往来が南下する。

米子城跡は米子城とその城下町から成る遺跡で、米子市の西部、弓浜半島の基部西側にあり、西は中海に面している。米子城は米子低地の西側縁辺の丘陵先端の標高90ｍの湊山に築かれている。この場所は眼下に中海が一望でき、さらに天然の良港をひかえ、中海水運の要衝地に占地している。城下町は米子城の北・東側に形成されており、湊山の山麓に内堀を巡らせ、さらにその外側にも外堀を巡らせている。内堀の内側（内郭）には天守閣をはじめとする城の諸施設があり、内堀と外堀の間（外郭）には武家屋敷がある。外堀の外には外堀と近世山陰道に沿って職人・町人の町が形成され、寺院を一直線に配置した寺町も形成されている。なお、武家屋敷のある外郭が町（ちょう）と呼ばれたのに対して職人・町人が居住する外堀の外は町（まち）と呼ばれて区分された。

第２節　歴史的環境

近世以前の米子城下は湊山山麓や沖積地及び砂丘上で断続的ではあるが、生活の痕跡が窺える。

縄文時代は久米第１遺跡、第５・９・21次調査（10、15、16）で岩礁性の旧地形を確認している。また、久米第１遺跡（９）では縄文時代前期初頭、前期末、中期、晩期の土器、石鏃、石錘、黒曜石剥片などが出土し、第５・９・21次調査でも縄文時代晩期の土器が出土している。

弥生時代は第７次調査（21）で弥生時代中期の遺物包含層と貝の堆積層を確認し、第25次調査（13）でも弥生時代中期中葉の遺物包含層を確認している。また、第21次調査では弥生時代中期の土坑14基と掘立柱建物１棟が確認され、前期～中期後葉の土器が出土している。また、第６次調査（７）では弥生時代末～古墳時代初頭の土器とともに土坑と溝が確認され、第２次調査（６）でも弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土しており、特にこれらの２遺跡からは畿内系土器が出土していることが注目される。なお、久米第１遺跡では前期～後期、第５次調査では前期の土器が出土している。

古墳時代は第21次調査で前期の溝１条と６世紀後半の土坑１基が確認され、前期～後期の土器が出土しており、特に前期のものには畿内系土器がみられる。また、第１次調査（８）では埴輪が出土し、久米第１遺跡でも６世紀中葉～７世紀中葉の須恵器とともに埴輪が出土しており、城山に古墳群が存在するものと推測される。なお、第１次調査、久米第１遺跡では前期の土器が出土し、第３・７・９・21・25次調査では須恵器が出土している。

奈良～平安時代は第21次調査で11～12世紀の井戸と土坑が確認されており、第６次調査では平安時代後半の土坑が確認され、河川堆積による砂層から８世紀中葉～９世紀後半の上器が出土している。また、久米第１遺跡では奈良～平安時代前半の上器が出土している。

中世は城下の大部分の遺跡から中世後半の遺物が出土しており、久米第１遺跡では15世紀後半～16世紀中葉に大規模な造成が行われている。また、烏津家「家久君上京日記」（天正３年　1576年）には「よなこといへる町に着き」とあり、中世後半には飯山山麓から湊山山麓にかけて中世米子城の城下町的な町が形成されていたものと思われる。また、久米第１遺跡では焼土層と炭化したオムスビ状の米塊を確認し、多くの五輪が井戸に捨てられた状態で検出されており、元亀２年（1571年）に羽倉孫兵衛が米子城を攻め、城下を焼き討ちしたことを裏付けている。

米子城の始まりは応仁～文明年間（1467～87年）に出雲国守護代尼子氏と伯耆山名氏との合戦の際、山名教之の一門、山名宗幸により出雲・伯耆国境警備の砦として築かれたものである。この砦は近世米子城の本丸が置かれた湊山の東側にある独立丘陵飯山（標高59ｍ）に築かれている。

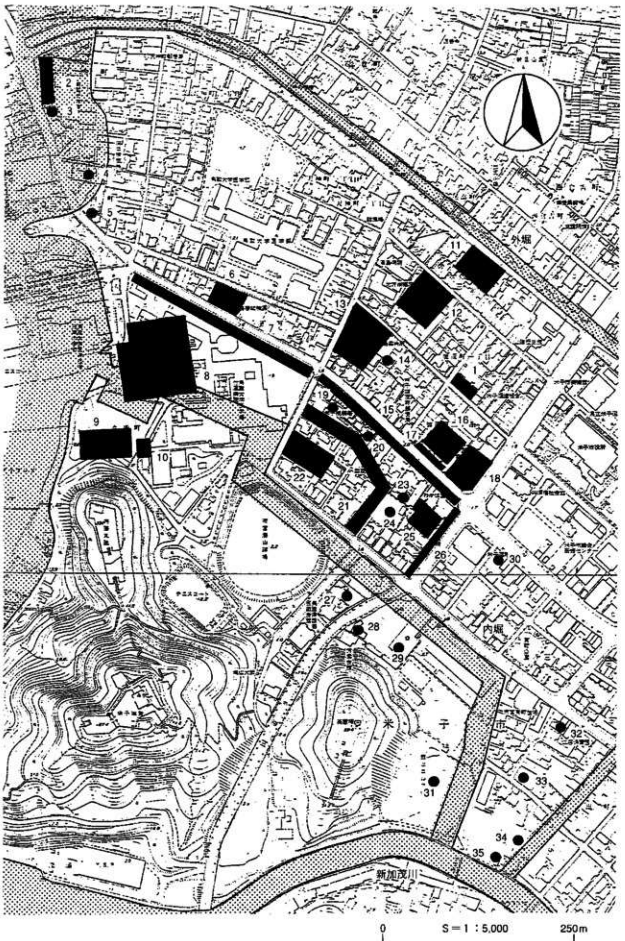
文献による“米子城”の初見は『出雲私史』の文明２年（1470年）の記述にみられ、その後も米子城は伯耆・出雲国境にあり、中海を臨む軍事、政略上の重要地でもあることから、尼子氏、毛利氏による攻守争奪の場となる。

近世米子城は天正19年（1591年）に東出雲・隠岐・西伯耆12万石を領有する吉川広家によって築城が開始されるが、慶長５年（1600年）に吉川氏は関ヶ原戦に敗北し、周防国岩国に転封となる。『戸田幸太夫覚書（吉川家文書）』によると、この時点で米子城は「十の内七つ程も出来候」とある。その後、吉川氏にかわって伯耆18万石の領主となった中村一忠によって慶長７年（1602年）に城が完成する。『米子城石垣御修覆御願絵図』（寛文７年　1667年）、『湊山金城米子新府』（享保５年　1720年）などの絵図によれば、城は湊山を本丸とし、その北麓に二の丸、三の丸を配し、さらに、飯山（采女丸）、丸山（内膳丸）を出丸として構成され、南・東・北に内・外二重の堀を巡らしている。城の裏手の深浦には中世以来の城の防衛と物資輸送の要地として、御船手曲輪が置かれ、ここに御船頭屋敷、番人小屋、船小屋が設けられていた。本丸には五重の大天主と四重の副天主（四重櫓）があり、内膳丸には櫓と倉庫が備えられていた。また、二の丸には城主館、櫓、武器庫、侍部屋、三の丸には作事小屋、既、材料小屋、米蔵、詰所等が配されていた。

中村氏は在城８年で断絶し、慶長15年（1610年）には伯耆国会見・汗入郡６万石の領主として加藤貞泰が城主となる。そして、元和３年（1617年）には因幡・伯耆の領主となった池田光政の一族池田由之が米子城預かり（３万２千石）となる。その後、寛永９年（1632年）からは池田家の家老荒尾氏が米子城預かり（１万５千石）となり、以後明治２年（1869年）まで続いた。城は明治５年（1872年）に士族に払い下げとなり、明治６年（1873年）には城内の建物類は売却され、数年後には取り壊される。

1	**第38次調査**	2	第26・29次調査	3	第28次調査	4	第30次調査	5	第15次調査
6	第２次調査	7	第６次調査	8	第１次調査	9	久米第１遺跡	10	第５次調査
11	第23・36次調査	12	第４次調査	13	第25次調査	14	第11次調査	15	第16・17・21次調査
16	第９次調査	17	第27次調査	18	第３次調査	19	第18次調査	20	第13次調査
21	第７次調査	22	第33次調査	23	第14次調査	24	第10次調査	25	第８次調査
26	第22次調査	27	第31次調査	28	第12次調査	29	第35次調査	30	第32次調査
31	第39次調査	32	第34次調査	33	第24次調査	34	第20次調査	35	第19次調査

表２　周辺遺跡一覧表



第１図　調査地及び周辺遺跡分布図

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

調査は排土置き場の都合上、調査区を２つに分け、まず、北西側の調査区（１区）の調査を行い、その後に南東側の調査区（２区）の調査を行った。

基本層序は現地表面から近現代の造成土、灰褐色粘質土（第１層）、茶褐色砂質土（第２層）、黒色粘質土（第３層）となっており、これ以下は砂が厚く堆積する。

検出した遺構は柵列２条、掘立柱建物２棟、溝状遺構11条、井戸１基、土坑６基である。

第２節　検出した遺構と遺物

ＳＡ－01（第４図）

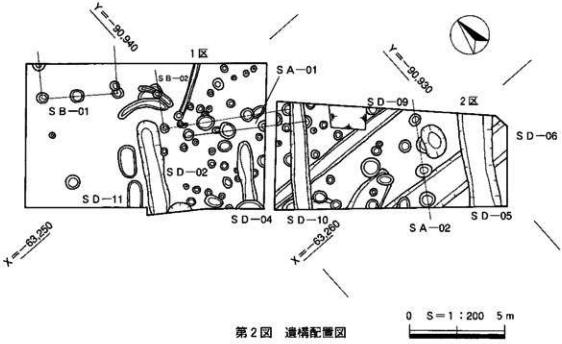
ＳＡ－01は３間分（6.3ｍ）を検出した。南東側は攪乱を受け、さらにその南東側の柱穴は調査区外に位置する可能性があるため、Ｐ－４で完結するのかあるいはさらに南東へのびるのかは不明である。柱穴は円形及び楕円形を呈しており、径50～80cm、深さ15～20cmをはかる。柱間はＰ－１～Ｐ－２が2.2ｍ、Ｐ－３～Ｐ－４が2.2ｍと等間であるが、Ｐ－２～Ｐ－３は1.9ｍと狭くなる。Ｐ－１には一辺12cmの柱痕と根石があり、Ｐ－３にも根石がある。主軸はＮ－58°－ｗである。

柱穴からは遺物は出土しなかった。

ＳＡ－02（第４図）

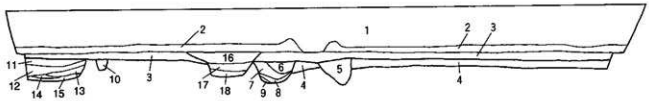
ＳＡ－02は３間分（4.3ｍ）を検出し、さらに北東及び南西にのびるものと思われる。柱穴は円形及び楕円形を呈しており、径60～90cm、深さ30～40cmをはかる。柱間はＰ－１～Ｐ－２が1.4ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３が1.4ｍ、Ｐ－３～Ｐ－４が1.5ｍでほぼ等間である。主軸はＮ－34°－Ｅである。

柱穴からは遺物は出土しなかった。



第２図　遺構配置図

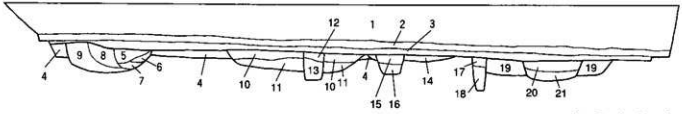
H=2.50m



1区南西壁

1　造成土
2　灰褐色粘質土（第1層）
3　茶褐色砂質土（第2層）
4　黒色粘質土（第3層）
5　灰白色粗粒砂（ＳＤ－11）
6　暗灰色粘土（ＳＤ－02）
7　灰褐色粘質土（ＳＤ－02）
8　暗灰褐色粘質土（ＳＤ－02　砂混じり）
9　灰褐色中粒砂（ＳＤ－02）
10　黒色粘質土
11　暗灰色砂質土
12　暗灰色粘土（乳褐色の有機物を含む）
13　黒色粘質土（炭化物、木質を含む）
14　灰褐色シルト
15　茶褐色粘質土（腐植土層）
16　灰褐色砂質土（ＳＥ－01　炭化物、鉄分を含む）
17　暗灰色粘質土（ＳＥ－01　礫、炭化物、鉄分を含む）
18　灰色砂と灰色粘質土の混合層（ＳＥ－01）

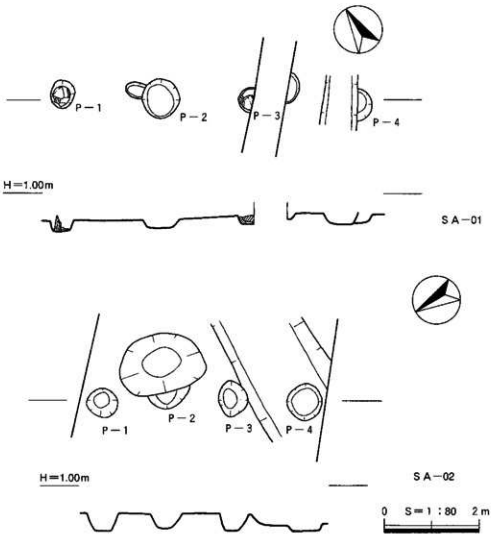
H=2.50m



2区南西壁

0　S＝1：80　2m

1　造成土
2　灰褐色粘質土（第1層）
3　茶褐色砂質土（第2層）
4　黒色粘質土（第3層）
5　灰色細粒砂と暗灰色粘土の混合層（ＳＤ－05）
6　暗灰色粘土（ＳＤ－05）
7　灰褐色粘土（ＳＤ－05　礫を含む）
8　灰色中粒砂（ＳＤ－05）
9　灰白色中粒砂（ＳＤ－05）
10　灰褐色粘質土（ＳＤ－06　礫、鉄分を含む）
11　暗灰色粘土（ＳＤ－06）
12　灰色微細粒砂と灰褐色粘質土の混合層（鉄分を含む）
13　灰色微細粒砂と灰褐色粘質土の混合層（礫を含む）
14　灰褐色粘質土（ＳＤ－08　礫を含む）
15　灰色細粒砂と灰色粘土の混合層
16　灰褐色砂質土
17　灰色細粒砂と灰色粘土の混合層
18　灰褐色粘質土
19　暗灰色土（鉄分を含む）
20　灰色砂質土（ＳＤ－10）
21　暗灰色粘土（ＳＤ－10　炭化物、明褐色の有機物を含む）



第４図　ＳＡ－01・02遺構図

ＳＢ－01（第５図）

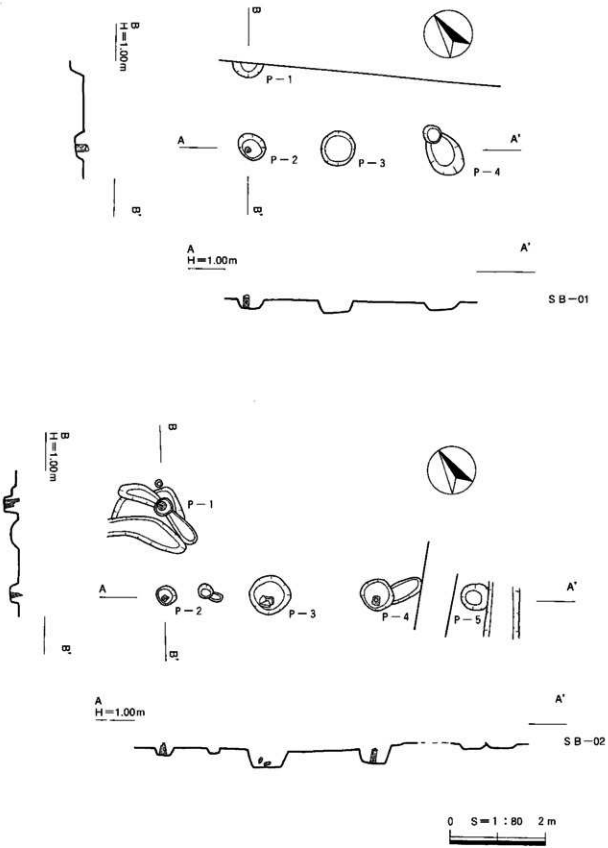
ＳＢ－01は北東側が調査区外にのびているが、桁行２間、梁行１間以上の建物である。建物の規模は桁行4.1ｍ、梁行1.8ｍ以上をはかり、柱穴は円形及び楕円形を呈しており、径50～100㎝、深さ20～30㎝をはかる。柱間はＰ－１～Ｐ－２が1.8ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３が1.9ｍとほぼ等間であるが、Ｐ－３～Ｐ－４は2.2ｍと広くなる。Ｐ－２には径12～14㎝の柱痕がある。主軸はＮ－55°－ｗである。

柱穴からは遺物は出土しなかった。

ＳＢ－02（第５図）

ＳＢ－02は北東側及び南東側が調査区外にのびているが、梁行１間以上の建物である。桁行についてはＰ－５で完結するのか、さらに南東へのびるのかは不明であるが、桁行３間あるいは４間以上のいずれかの建物が想定できる。建物の規模は桁行３間の場合は桁行6.4ｍ、桁行４間以上の場合は桁行6.4ｍ以上、梁行3.5ｍをはかる。柱穴は円形を呈しており、径40～90㎝、深さ10～40㎝をはかる。柱間はＰ－１～Ｐ－２が2.0ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３が2.1ｍ、Ｐ－４～Ｐ－５が2.0ｍとほぼ等間であるが、Ｐ－３～Ｐ－４は2.3ｍとやや広くなる。Ｐ－１には径18㎝、Ｐ－２には16×17㎝、Ｐ－４には16×８㎝の柱痕があり、Ｐ－３には根石がある。主軸はＮ－56°－ｗである。

柱穴からは遺物は出土しなかった。



第5図　SB－01・02遺構図

ＳＤ－02（第６図）

ＳＤ－02は直線的にのびる溝で、北東側はＳＢ－01の北西で完結するが、南西側はさらに調査区外へのびている。現状で長さ5.1ｍ、幅1.0～1.2ｍ、深さ0.4ｍをはかり、主軸はＮ－32°－Ｅである。

遺物は図示できないが、陶器と土器が出土した。

ＳＤ－04（第６図）

ＳＤ－04は直線的にのびる溝で、北東側はＳＡ－01の南西で完結するが、南西側はさらに調査区外へのびている。現状で長さ3.2ｍ、幅0.6～0.7ｍ、深さ0.1～0.2ｍをはかり、主軸はＮ－35°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－05（第６図）

ＳＤ－05は直線的にのびる溝で、北東側、南西側ともさらに調査区外へのびている。ＳＤ－06を切っており、現状で長さ5.1ｍ、幅1.5～1.9ｍ、深さ0.3ｍをはかり、主軸はＮ－35°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－06（第６図）

ＳＤ－06は直線的にのびる溝で、東側、西側ともさらに調査区外へのびている。ＳＤ－05によって切られており、ＳＤ－06が埋没した後にＳＡ－02のＰ－４が掘られている。現状で長さ7.7ｍ、幅1.7～1.9ｍ、深さ0.2ｍをはかり、主軸はＮ－87°－ｗである。

遺物は出土しなかった。

ＳＤ－09（第７図）

ＳＤ－09は直線的にのびる溝で、東側、西側ともさらに調査区外へのびている。ＳＤ－10によって切られており、現状で長さ9.4ｍ、幅0.7～0.8ｍ、深さ0.2～0.4ｍをはかり、主軸はＮ－87°－ｗである。

遺物は図示できないが土器が出土した。

ＳＤ－10（第７図）

ＳＤ－10は直線的にのびる溝で、北東側、南西側ともさらに調査区外へのびている。ＳＡ－01、ＳＢ－02、ＳＤ－09を切っており、現状で長さ5.7ｍ、幅0.6～1.1ｍ、深さ0.2ｍをはかり、主軸はＮ－38°－Ｅである。

遺物は陶器、擂鉢、瓦、須恵器が出土した。１、２は陶器で、１は灯明皿、２は肥前系の鉢である。３は土器の皿、４は擂鉢である。

ＳＤ－11（第７図）

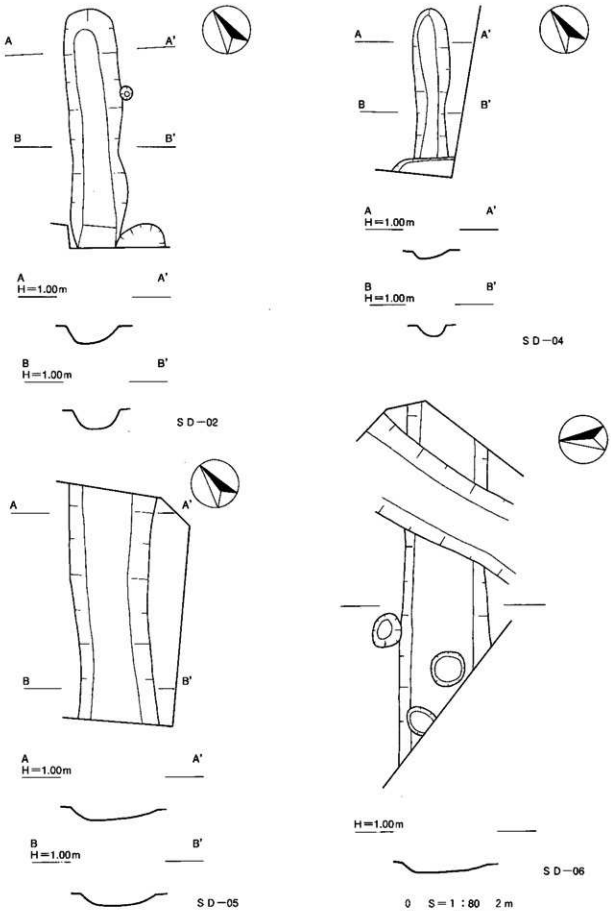
ＳＤ－11は現状で長さ6.1ｍ、幅0.7～0.8ｍ、深さ0.2ｍをはかる。主軸はＮ－40°－Ｅである。

遺物は出土しなかった。

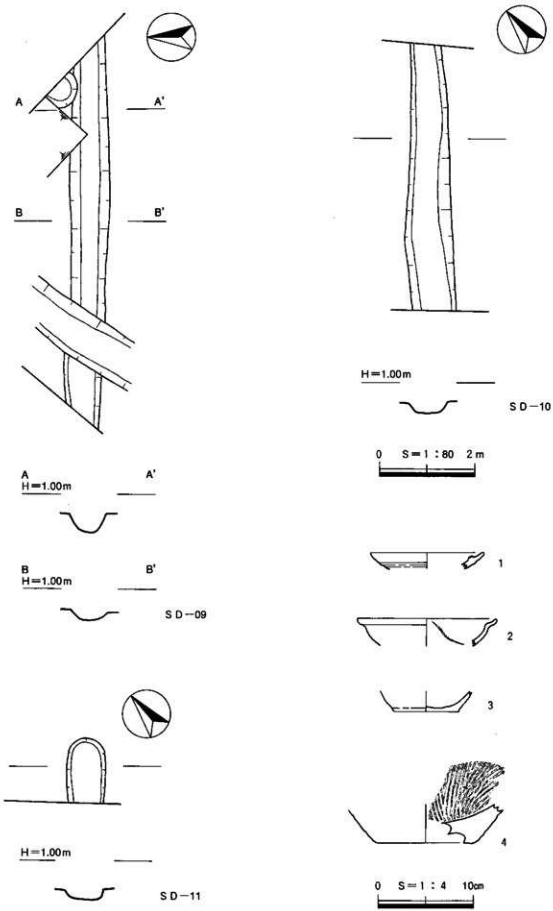
ＳＥ－01（第８図）

ＳＥ－01は石組の井戸で、土層断面では第２層上面から堀込まれているが、第２層上面では検出ができず、第４層上面で検出した。掘方は第４層上面では径2.5ｍの円形を呈しており、第２層上面からの深さは0.5ｍをはかる。掘り込みは北西側はなだらかに立ち上がるが、南東側は２段になっている。石組は北西側では２段になっているが、これ以外は１段である。

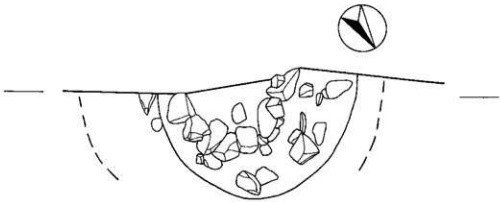
遺物は図示できないが陶器が出土した。



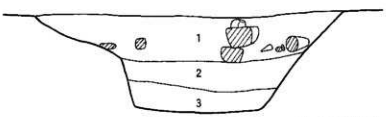
第6図　SD−02・04・05・06遺構図



第７図　ＳＤ－09・10・11遺構図及びＳＤ－10出土遺物実測図



H＝1.00m



1　灰褐色粘質土（炭化物、鉄分を含む）
2　暗灰色粘質土（礫、炭化物、鉄分を含む）
3　灰色砂と灰色粘質土の混合層

0　S＝1：20　50cm

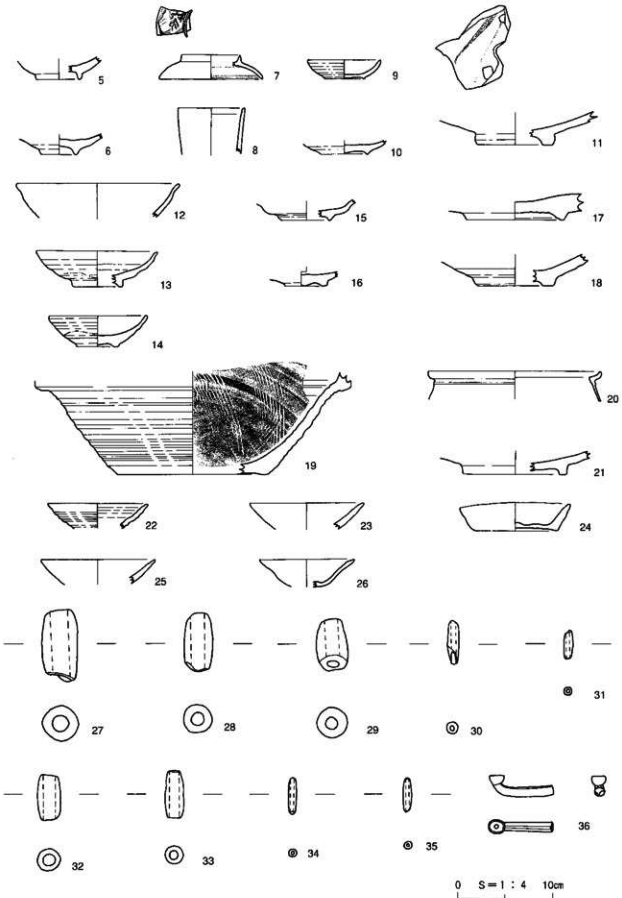
第８図　ＳＥ－01遺構図

第３節　遺構外出土遺物（第９図）

５～８は縄器である。５は碗で、高台に砂が付着している。６は皿で、見込みには砂が付着し、さらに蛇ノ目釉剥ぎが施されている。また、高台内外面とも無釉である。７は蓋である。８はそば猪口で、口縁内面は釉剥ぎが施されている。

９～21は陶器である。９、10は瀬戸・美濃系の皿、11は志野の大皿あるいは鉢で、見込みには胎土目がある。12～18は肥前系である。12は埦、13～16は皿で、いずれも見込みには目跡は認められない。17、18は大皿あるいは鉢で、18の見込みには胎土目がある。19は備前の擂鉢である。20、21は在地系で、20は鍋、21は大皿あるいは鉢である。

22～26は土器で、いずれも煤あるいは有機物が付着していることから、灯明皿として用いられたものである。27～35は土錘、36は煙管の雁首である。



第９図　遺構外出土遺物実測図

第4章　ま　と　め

今回の調査では、掘立柱建物と柵列、屋敷境界であると思われる溝状遺構、井戸を検出した。これらは切合関係や主軸方向、検出面から5時期に分類できるものと思われる。なお、各々の時期については遺構内からの出土遺物が少ないことから、詳細は不明である。

以下、時期毎に概観したい。

第1期

第1期の遺構にはＳＤ－06とＳＤ－09がある。いずれもＮ－87°－Ｗの主軸方向をとり、心々間距離は4.8ｍをはかる。

『鳥取縣西伯郡米子町地圖』（明治24年　1891）では外堀の東側にＮ－３～４°－Ｅの方向をとる方形地割（条里）がみられ、方向的にはＳＤ－06とＳＤ－09と直交するかたちとなる。この方形地割（条里）の成立がいつまで遡るものかは不明であるが、ＳＤ－06とＳＤ－09はこの方形地割（条里）との関連が窺える。また、この方形地割（条里）と米子城下の町割の関係について、その可能性が指摘されており（岩佐　1991）、米子城下の町割の形成を考えるうえでＳＤ－06とＳＤ－09は大変興味深いものである。なお、条里地割を利用した城下町の形成には三重県名張、奈良県大和郡山等の事例がある。

第2期

第2期の遺構にはＳＡ－02、ＳＢ－01・02、ＳＤ－04・05がある。ＳＢ－01はＮ－55°－Ｗ、ＳＢ－02はＮ－56°－Ｗ、ＳＡ－02はＮ－34°－Ｅ、ＳＤ－04・05はＮ－35°－Ｅの主軸方向をとる。ＳＤ－05は屋敷境界の溝で、ＳＡ－02は屋敷地の遮蔽施設であると考えられる。ＳＢ－01とＳＢ－02は北東側は調査区外にかかっているために、梁行の間数は確認できていないが、江戸期の屋敷境界を踏襲したものと推測される隣地との境界線からの距離から考えると梁行はＳＢ－01は１間、ＳＢ－02は２間程度であると推測される。

第3期

第3期の遺構にはＳＡ－01とＳＤ－02がある。ＳＡ－01はＮ－58°－Ｗ、ＳＤ－02はＮ－32°－Ｅの主軸方向をとる。ＳＤ－02は屋敷境界の溝、ＳＡ－01は屋敷地内の区画塀であると思われる。

第4期

第4期の遺構にはＳＤ－10とＳＤ－11がある。ＳＤ－10はＮ－38°－Ｅ、ＳＤ－11はＮ－40°－Ｅの主軸方向をとり、心々間距離は8.8ｍである。いずれも土地境界の溝であると思われる。

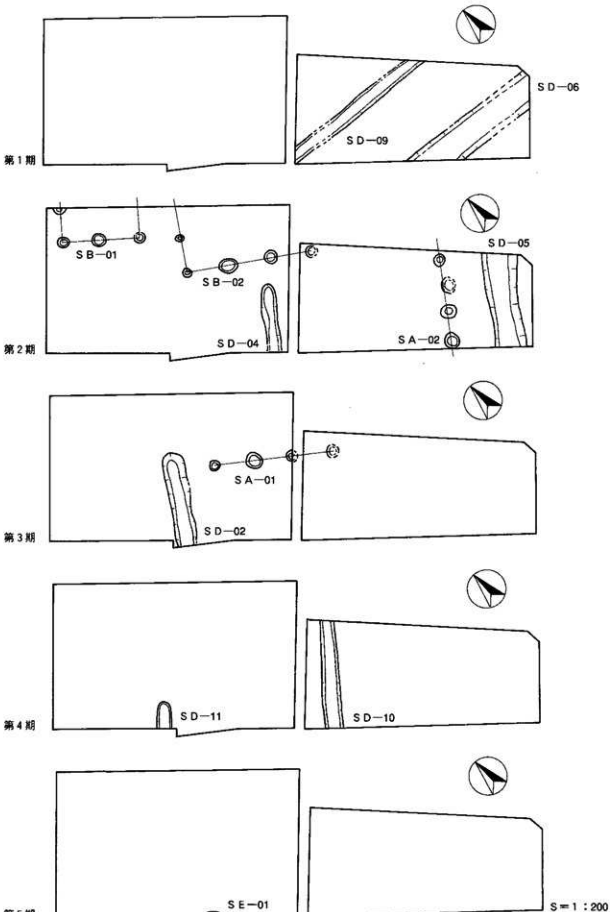
第5期

第5期の遺構にはＳＥ－01がある。

ＳＥ－01は石組の井戸で、『鳥取縣米子市字限地圖』（大正４年　1915）以降の屋敷に伴うものと考えられる。

以上、主軸方向を主体に遺構の変遷をみてきたが、あらためて主軸方向の変遷をみてみると、第１期はＮ－87°－Ｗ、第２期はＮ－34～35°－Ｅ、第３期はＮ－32°－Ｅ、第４期はＮ－38～40°－Ｅとなっている。

米子城下の街区は長方形を呈しておらず、場所によって長短があり、そのため街区を取り囲む道も各々主軸方向が異なる。国道９号線の北西側は比較的江戸期の町割が残っており、現在も当時の道が拡幅されて利用されて


第１期
ＳＤ－09
ＳＤ－06
第２期
ＳＢ－01
ＳＢ－02
ＳＤ－04
ＳＤ－05
ＳＡ－02
第３期
ＳＡ－01
ＳＤ－02
第４期
ＳＤ－11
ＳＤ－10
第５期
ＳＥ－01
Ｓ＝１：200

第10図　遺構変遷図

いる。調査地北西側の道の主軸方向はN－38°－Eで、第4期の遺構の主軸方向とほぼ一致し、調査地南東側の国道9号線の主軸方向はN－35°－Eで、第2期の遺構の主軸方向とほぼ一致する。このことから、第2期の遺構は米子城内郭の正門へ通じる街区南東側の道を、第4期の遺構は街区北西側の道を基準にして形成された可能性がある。

次に現存する米子城下の絵図から調査地の土地利用の変遷をみてみると、まず、17世紀後半以前の『米子城下古絵図』では侍屋敷となっている。今回の調査では当該期の遺物が出土しているが、量的には少なく、遺構も未確認であるため、屋敷の形成に関わる具体像は明らかではない。また、『伯耆国米子平図』（宝永6年　1709）と『濃山金城米子新府』（享保5年　1720）では陸田、18世紀後半の『米子御城下図』では明地畑、『米子城市圖』（安政年間　1854～1859）では田、『米子町田畑御改宗旨地續総計』（明治3年　1870）では屋敷は存在せず、『鳥取縣西伯郡米子町地圖』（明治24年　1891）では田、『鳥取縣米子市字限地圖』（大正4年　1915）では宅地となっており、絵図をみる限りでは調査地は18世紀初頭～19世紀末には屋敷は存在していない。しかし、今回の調査では第2期に掘立柱建物2棟と屋敷境界溝、屋敷の遮蔽施設を確認している。これらは出土遺物から20世紀初頭まで下るものではなく、18世紀後半～19世紀の範疇におさまるものであると思われ、絵図が存在しない時期のものであると考えられる。

参考文献

岩永　実　「鳥取県の条里地域の研究（二）」　『鳥取大学学芸学部研究報告（人文科学）』Vol. 13　1962

畠中　弘　『弓浜物語（伯耆文庫6）』　1989

岩佐武彦　「明治期における米子市街地の発展過程」　『地図』Vol. 29　No.2　1991

米子市立山陰歴史館　『米子城絵図面　米子城資料第1集』　1990

米子市　『新修米子市史』　第12巻　資料編　絵図・地図　1997

『米子城市圖』　1854～1859

『米子町田畑御改宗旨地續総計』　1870

『鳥取縣西伯郡米子町地圖』　1891

『鳥取縣米子市字限地圖』　1915

出土陶磁器、土器観察表

遺物番号	出土地	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産地	特徴
1	SD−10	陶器	灯明皿	※ 11.8		△ 1.6		
2	SD−10	陶器	鉢	※ 18.8		△ 2.9	肥前系	
3	SD−10	土器	皿		6.8	△ 2.2		
4	SD−10	陶器	擂鉢		※ 10.2	△ 4.1		
5	2区2層	磁器	碗		※ 4.6	△ 2.4		高台に砂付着
6	1区2層	磁器	皿		3.8	△ 2.2		見込み蛇ノ目釉剥ぎ、砂付着
7	1区2層	磁器	蓋	※ 10.8		2.6		
8	2区2層	磁器	そば猪口	※ 6.8		△ 4.9		口縁部内面釉剥ぎ
9	1区2層	陶器	皿	7.6	4.0	2.0	瀬戸・美濃系	
10	1区2層	陶器	皿		※ 5.0	△ 1.4	瀬戸・美濃系	
11	1区2層	陶器	大皿or鉢		※ 8.0	△ 3.6	志野	見込みに胎土目あり
12	1区2層	陶器	瓶	※ 17.0		△ 3.7	肥前系	
13	2区2層	陶器	皿	※ 12.4	※ 5.0	3.8	肥前系	見込みに目跡なし
14	1区3層	陶器	皿	※ 10.2	※ 3.6	3.3	肥前系	見込みに目跡なし
15	2区3層	陶器	皿		※ 5.2	△ 2.1	肥前系	見込みに目跡なし
16	1区2層	陶器	皿		※ 4.4	△ 1.5	肥前系	見込みに目跡なし
17	1区2層	陶器	大皿or鉢		10.4	△ 2.8	肥前系	
18	1区2層	陶器	大皿or鉢		※ 7.8	△ 3.3	肥前系	見込みに胎土目あり
19	2区2層	陶器	擂鉢		※ 16.0	△ 10.8	備前	
20	2区2層	陶器	鍋	※ 18.0		△ 3.0	在地系	
21	1区2層	陶器	大皿or鉢		※ 10.8	△ 2.5	在地系	
22	2区3層	土器	灯明皿	※ 10.4		△ 2.6		煤あるいは有機物付着
23	2区3層	土器	灯明皿	※ 15.8		△ 2.6		煤あるいは有機物付着
24	2区2層	上器	灯明皿	※ 11.8		△ 2.8		煤あるいは有機物付着
25	2区3層	十器	灯明皿	※ 9.8		△ 2.9		煤あるいは有機物付着
26	2区2層	上器	灯明皿	11.0	8.8	3.0		煤あるいは有機物付着

図　　版

1区全景（南東から）

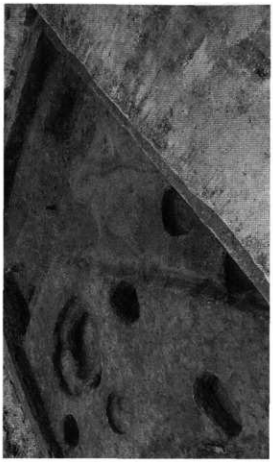
2区全景（北西から）

ＳＢ—01（北西から）

ＳＡ—01、ＳＢ—02（南東から）

図版 2

SD—04（南西から）

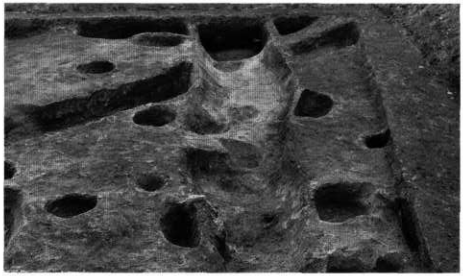


SD—06（西から）

SD—02（南西から）

SD—05（北東から）

ＳＤ―09（東から）



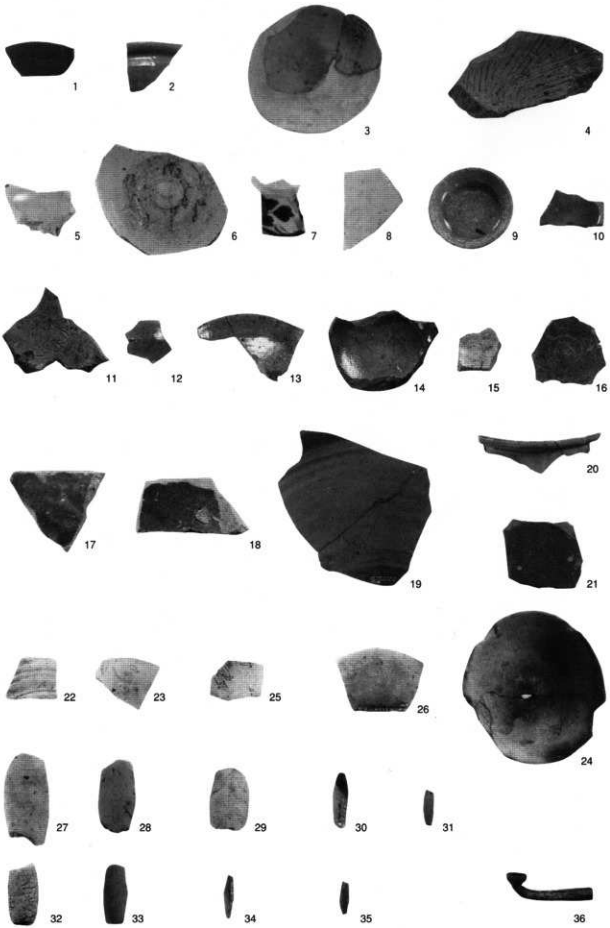
ＳＤ―10（北東から）

ＳＥ―01

ＳＥ―01断面

図版３

図版 4


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
25
26
24
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	よなごじょうせき
書　　名	米子城跡 第38次調査
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	4 1
編 著 者 名	高橋浩樹
編 集 機 関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒683−0033　鳥取県米子市長砂町935−1　TEL0859−22−7209
発 行 年 月 日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
米子城跡 第38次調査	鳥取県米子市 加茂町	31202	719	35度 25分 33秒	133度 19分 54秒	20020409～ 20020426	273.70㎡	マンション建築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米子城跡 第38次調査	城下町	江戸時代 明　治	柵列　溝状遺構 掘立柱建物 井戸	陶磁器、瓦、煙管、土錘	

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書４１

米子城跡　第３８次調査

２００３年３月

編集・発行　財団法人　米子市教育文化事業団

〒６８３－００３３　鳥取県米子市長砂町９３５－１

印　　刷　(有)米子プリント社